

エントリー名：尼崎市立小田北中学校

活動名：学ぶ喜びを感じ挑戦する力を育てる
 ～じぶん未来ラボ×キャリアデザインステップ～

学ぶ喜びを感じ、
 挑戦する力を育てる

解決すべき課題：

①生徒の「自分で課題を立てる」機会の不足

令和 6 年度全国学力・学習状況調査において、「総合的な学習の時間では、自分で課題を立てて情報を集め、整理して調べたことを発表する学習活動に取り組んでいる」の割合は、全国 82.2%、兵庫県 72.5%に対し、本校は 65.1%と低水準であった。

②文部科学省「義務教育に関する意識に係る調査」によって可視化された、生徒の内面の『乖離』

独自に実施した文部科学省「義務教育に関する意識に係る調査」のアンケート調査の結果から、生徒 340 名中 237 名が「失敗を恐れず挑戦する力」を身につけたい力と回答した一方で、「学校生活で身につけている」と答えたのは 96 名にとどまり、差は 141 名分と大きかった。

③教員の多様な学力観・価値観の尊重下における、教員間議論の収斂の困難さ

意欲ある教員は比較的多いが、教育観や学力の捉え方が多様であるため、トップダウン・ボトムアップのいずれの方法でテーマを設定してみても、共通理解の形成・浸透に課題があった。

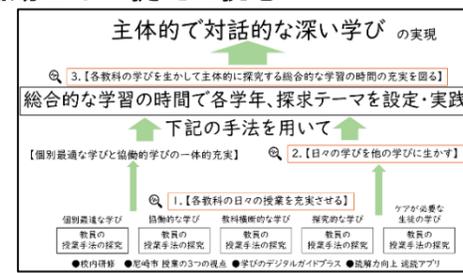
目標：教員が、自身の仕事を「自分で課題を立てる」探究活動として捉えて挑む

方針：（解決すべき課題の①②③にリンク）

①教員それぞれ授業改善を「授業探究」と称し、教員自身が探究手法を自己選択・自己決定し、生徒の活動に繋げる

②「挑戦する力」にスポットあてた対話・情報共有の機会を計画的かつ継続的に設ける

③教員も生徒も口に出して言える最上位の目標設定を、「時間をかけてでも」行う



活動内容：（解決すべき課題の①②③にリンク）

1【教員の「授業探究」手法の自己選択、自己決定】 まず教員は日々の授業内容の充実から着手する。次に、日々の学びを他の学びに接続する場面を設計し、授業実践を重ねる。同時に、疎に実践を通じて生徒に多様な探究手法を幅広く定着させることをねらう。①

2【探究手法の5つの部会の設立】 個別最適な学び、協働的な学び、教科横断的な学び、探究的な学び、ケアが必要な生徒の学び、の5つの部会を設立する。教員間の対話・情報共有の機会を増設し、本音で話せる機会をつくる。「挑戦する力」に焦点を当て、授業手法のアイデア探索と、各教員の良さを活かした対話の機会を計画的かつ継続的に設ける。②

3【小学校と連携して探究活動についての研修会を設定する】 神戸大学から講師を招聘して高次な探究活動について、共通理解を図る。また、先進的な探究活動を行っている校区内小学校と情報共有を行い、互いの活動に生かす。①②

4【校内研究授業と尼崎市内の探究部会と接続】 自校から尼崎市内の探究部会に属している教員を介して、研究授業などにおいて意見交換・情報共有を行う。②

5【各学年の総合的な学習の時間において高次なテーマでの探究活動の計画と実施】 3年生は「進路選択」における探究『じぶん未来ラボ』、1年生は「自己理解」、2年生は「他者理解」に重点を置くキャリア教育探究『キャリアデザインステップ』を計画・実施する。各教科の学びを生かした主体的な探究を高次なテーマに応用し、総合的な学習の時間の充実を図る。

①③

6【活動を進めていく上で、議論が噛み合わなくなってしまう時に立ち返って考えるための上位の目標・共通の認識の作成】 向上させたい「学力」とは何か？またその理由について、全教員 25 名にアンケート調査を実施する。内容を整理・分析して、多様な価値観から共通部分

を抽出、上位目標として提案、合意形成を図る。通信を作成し小まめに全体情報発信する。③
 7【実践後の成果の検討と確認】 実践後、全国学力・学習状況調査と文部科学省「義務教育に関する意識に係る調査」を事後調査として実施する。アンケート調査だけでは捉えられない部分はインタビュー調査を検討する。①②③

取組の過程：最上位の目標の合意形成が、最初の大きな壁だった。トップダウンなら早い反面、中身が伴いにくい。一方でボトムアップは意見が拡散し収斂しない。そこで「困ること」に焦点を当てた。まず各教員が、想定される負担や不公平、生徒像の違いなど、発生しうる「困ること」をどう回避・緩和できるかを各学年会議のブレインストーミングで出し切り、「誰も困らない」言い回しと運用条件を組み合わせていった。この手順で、想定1ヶ月半かける予定だった提案作成は3ヶ月かかったが、正しさの押しつけ合いを避けつつ、合意形成を図ることができた。

現場の実践を止めないために、授業改善を「授業探究」と位置づけ、同時並行した。教員の自己選択・自己決定で参加できる選択制の部会を立ち上げた。当初は①個別最適な学び②協働的な学び③教科横断的な学び④探究的な学びの4部会だったが、「この構成では興味はない。可視化しやすい認知領域に偏り、不登校・サポートルーム・特別支援の生徒に必要な非認知能力が置き去りになりえる」という、子ども起点のもっともな意見が現場から上がった。これを受け、⑤「ケアが必要な生徒の学び」を新設。包摂の観点を組織設計に織り込み、取りこぼしを減らした。

外部との協働では、ICT 活用と校内研究に先進的な校区内の下坂部小学校と情報共有を進める一方、神戸大学と接続して校内研修を実施。前半ディスカッション、後半は講話と質疑応答で、次期学習指導要領の方向を踏まえつつ探究の設計視点を学び、「総合的な学習の時間が各教科の上位で機能する」という見通しを得た。これは本校の「各教科の日々の授業を充実させる」という学力向上方針と一致し、実践への自信につながった。市内ネットワークでも土台を広げた。研究推進委員会とは別の社会科教員が尼崎市内探究部会に参画し、今年度は3年公民の探究的な学びを核に校内研究授業を実施する。これにより、市内の探究動向をいち早く収集し、迅速に発信できる体制が整いつつあり、本校の役割も拡張しつつある。この変化を好転と捉えている。

学年別の実践は、総合的な学習の時間に計画的に位置付けて時間資源を確保した。3年生は卒業生（現役高校生）の5分講話＋質疑による「小田北フォーラム」で進路の自分事化をねらう。続く『じぶん未来ラボ』では、生徒は学び方を個人・協働・教員伴走から自己選択・自己決定する。そして志望理由書や活動記録の早期作成に着手する。希望者は志望校別のグループで、非公開を望む生徒は個人で進められるよう、プライバシー選択も担保した。2年生は探究活動を3段階化。①現場インタビューで仕事のビジョン・やりがい・課題・中学で有用だった学び等を聞き取り、②個人・協働・教員伴走から学び方を選択・自己決定して整理・分析・比較・考察、③「もしこの職業が無くなったら」「この職業のオリンピックがあるなら、競われるスキルは？」など創造的な問いで職業に求められる本質に迫る。1年生は性格・職業適性診断の結果を鵜呑みにせず、「それって本当か？」と問い直すことを軸に、同学年で相互インタビューを行い、他者視点と自己の実感を統合して自己理解を再記述する。この段階性から『キャリアデザインステップ』と命名した。

活動の成果：『「困ること」を起点に歩む』多様な価値観を収斂、「相手を困らせない案」で合意を得る仕組み短期的・長期的学力を教員調査で把握し、支障の生まれにくい合意軸で全校の方針を一つに。

・学びの多様化を推進 全教員が1つの授業改善を行い、意識改革を行動レベルへ昇華。
 ・生徒の意識変容の兆し 『じぶん未来ラボ』後の調査、文部科学省「義務教育に関する意識に係る調査」では、20項目中6項目が増加。統計的分析にかけ、有意な差が確認できた（多元思考、発表工夫、主体的、思考まとめ、など。※仮のコード化）。また、別アンケートでは「挑戦したいことがある」項目が5段階中3.59から4.06に増加した。これも統計的分析にかけ、有意な差が確認できた。実践の効果の可能性が示された。
 ・ケアを要する生徒への学びの保障 農園での栽培を通して地域と交流し社会性を導く。

